

京都部落問題 研究資料センター通信

第30号

発行日 2013年1月25日 (年4回発行)

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

報告 2012年度部落史連続講座

〜全国水平社をめぐって〜

当資料センター主催の「部落史連続講座」全国水平社をめぐって」を京都府部落解放センターで、十一月九日、一六日、十二月七日、一四日の四回にわたり開催しました。毎回、二〇名を超える参加があり、熱心に聞いてくださいました。各回の講演の要旨は次のとおりです。

第1回

初期水平社の可能性

講師 井岡康時さん
(奈良県立同和問題関係史料センター)

国勢調査や意識調査の結果から現代の部落問題をめぐって解決しなければならぬ課題として「少子高齢化を背景とした人口減」と「多様な啓発活動にもかかわらず衰微しない差別意識」をあげて、これらの具体的な課題を解決するために歴史をさかのぼって考えることが必要であるとされた。

大正期の奈良県の融和運動・水平社運動は、人口増加を背景とした地域の共同体の緩みに対して、自治や自覚を重んじて自らの手で部落問題を解決しようとした。また、奈良県水平社の特徴として、

生活改善などは枝葉の問題で差別意識こそが肝心な問題であると捉える傾向が強かった。

こうした歴史から学ぶ点として、自治や自覚を重視する姿勢は現在でも大きな教訓としてあるのではないか。また、水平社が「エタである事を誇り得る時が来た」と、価値の転換を図ろうとしたことは、多様なマイノリティが主張をできるようになった現在、大きな意義を持つ。一方、大正期の運動は経済成長を背景としており、時代背景が大きく異なる現代では、その手法は通用しない。また、差別意識についても、部落だけの取り組みでは解決できず、地域共同の課題として解決の道を探る知恵と工夫が求められる。これまでの運動では経験をしたことのない少子高齢化といった状況の中で、ゼロから新たな運動を作っていくことを考えていかねばならないとされた。

第2回

部落差別撤廃運動と

本願寺教団・『中外日報』

講師 奥本武裕さん
(奈良県立同和問題関係史料センター)

まず問題意識として、融和運動や部落改善運動といった水平社以外の部落差別をなくそうとしていた様々な運動について、水平運動からの距離でその運動の評価をする傾向を批判し、それらの運動がもっていた理念や活動、限界をそれぞれに即してみていくことの重要性を訴えられた。

そういった問題意識のもとで、具体的に二点について詳しく説明された。

まず、江戸時代に浄土真宗本願寺派の中で起きた『三業惑乱』という教義論争の中で、奈良県の部落寺院が反主流として最後まで本山に抵抗していったという事実と、その子孫が明治に入って広い人脈をもつジャーナリストになり、また水平社の戦闘的な活動家になるといった、部落に蓄積された伝統にもっと注目すべきであるとされた。

また、運動の理念や成果だけでなく、運動を通じて部落内外にどのような関係がつけられてきたのかという点に注目することが必要であるとして、水平社に非常に協力的であった京都の『中外日報』を取り上げて、創業者、主筆、記者たちがどのように部落問題と出会ってきたのか、なぜ水平社擁護の姿勢を貫いたのかという視点でさらに研究を深めていきたいとされた。

第3回

水平社創立90周年

熱と光を求めて

—水平社創立の思想に学ぶ—

講師 駒井 忠之さん

(水平社博物館)

水平社創立にあたった中心メンバーは、奈良県御所市柏原の青年たちであった。柏原から水平社が生まれた背景には明治から小学校の統合闘争などでの闘いの歴史があり、又、膠、桐材産業に支えられた豊かな経済力があつた。また大和同志会という自主的部落改善運動が取り組まれた地でもあつた。この大和同志会の活動は近年再評価されており、部落民の自立を訴えて独自の運動を展開し、そこで議論は「水平社宣言」にも影響を与えるものであつた。

柏原での青年会活動、大和同志会、燕会といった組織での活動が全国水平社創立へとつながつたのである。そして、これらの団体は「解放令」との関連で天皇制への親和性を持つていたことも押さえておく必要があるとされた。

創立大会の日付、参加者人数、海外での紹介などについても詳しい資料をもとに説明された。

最後に、個々の違いを認め尊重できる社会こそがめざしていくべき社会であると締めくくられた。

第4回

全国水平社の創立と

融和運動

講師 手島 一雄さん

(立命館大学講師)

従来、部落改善・融和運動と水平運動は対立するもので、「融和運動を克服した水平運動」という見方が主流だったが、研究の進展で、融和運動は水平運動の前提を作り互いに影響しあつた面が明らかになってきた。両方の運動の特徴を押さえて総合的に捉えるというスタンスで水平社の創立、運動の展開を明らかにしたいとされた。まず、部落改善運動の進展の中で部落民の社会進出が周辺との軋轢を生み、部落大衆の立ち上がりを生じさせ、水平運動成立の大前提となつた。この差別への立ち上がりとしてあつた諦観の打破を訴えるものとして水平社宣言を位置づけられた。また、一九二三、四年頃には水平社と全国融和連盟とが友好的な関係をもち、水平運動に欠ける面を融和運動が補う役割をもつていたことがわかる。これは水平社が社会主義革命路線へ方針転換する中で崩れるのだが、その後の戦争協力の問題を考える上でも融和運動との関係を総合的に検証する必要性を訴えられた。

本の紹介

八箇亮仁著

『病む社会・国家と被差別部落』

田中和男

(龍谷大学非常勤講師)

社会的排除という言葉には、差別や排除を生み出した社会の手による解決の必要性が示唆されている。しかし政治家や官僚、学者・知識人が、社会的排除の解決が国民的課題だと強調するのを聞くと、社会的排除の原因の一端を自らは担っていないのか、と突っ込みを入れたくなる。年末の再度の「政権交代」で発足した自公連立の安倍(晋三)政権は、いわゆる朝鮮学校の高校生に対する授業料支援は行わないとの決定を早々と下した。その際、わざわざ、これは拉致問題の解決のためであり「民族差別でない」との断りをつけている。しかし、これはどう考えても、行政が率先して差別を是認し奨励しているといふ言いがたない。

のことが考えられる。部落の起源を前近代に、遠く古代やさらに日本文化の特質にまで求める人がいるかもしれないが、幕末・維新时期以降を近代と考えた場合、部落差別の画期として、一八七一(明治四)年の明治政府による賤称廃止令を挙げることができる。しばしば解放令とも呼ばれる太政官布告は部落差別を廃止するものではなく、前近代の各地の様々な被差別民をエタ・非人として総括し新たな差別を創出した。エタ・非人に代わる「新平民」や「特種(殊)部落」などの呼称の使用の背後にも「国家の影」が感じ取られる。部落問題は部落に起因する問題ではなく、部落を取り巻く社会の中での関係性の「病」である。部落差別の解消は国民的課題ではあつても、その創出に国民が平等に責任を負つていたわけではない。賤称廃止令は、差別される対象としてエタ・

非人を特定したし、政府が指導性を持った部落改善運動の中でも、部落問題を部落の問題（部落は貧困だ、不潔だとする言説）として、差別の拡大をもたらした。

このように、部落問題は「国家的な歴史的背景」を持つと捉え、差別・被差別を構造的に抱える「病む社会・国家」が特定の人・地域を差異化し排除するのに対して、それと向きあい、差別の解消へと努力する人々の思想や運動の可能性を、一九二二年の全国水平社の創立以前の歴史の中に探り出そうとしたのが、八箇亮仁さんの新刊著書『病む社会・国家と被差別部落』である。八箇さんは、六〇年代末の学園闘争の活発な頃、同志社大学から京都大学大学院で教育思想史を学んだ。常盤会短期大学勤務をした後、現在も予備校講師として教育実践にも取り組んでいる。あとがきの初出の紹介によれば、ベースとなった最も古い論文が一九七八年発表とあるから、本書は三〇年以上の著者の部落問題についての探求の結晶ともいえる。著者の持続する志にまずは敬意を表すとともに、短い文章で紹介する非礼を詫びておかなければ

ならない。

と言いつつ、五〇〇頁以上の大著の内容を簡単に紹介しておかねばならない。筆者の関心による偏りがあることをあらかじめ断っておきたい。本書は被差別部落を社会・国家との関係、被差別者と差別者の相互関係を分析の対象としている。序論で、八箇さんのこうした部落問題の基本的な認識と本書の課題が設定される。社会・国家の病ととらえる視点は、解消への努力が困難ではあってもいざれば治癒の道につながることを示唆される。部落改善・融和運動を水平社設立に収斂するものとして評価する傾向のある運動史的研究、内務省を中心とする改善政策を公的救済の議論などを抜きに評価する政策的研究、天皇制の半封建性や独占資本主義への早期的転質など基底還元的理解を持つ構造的研究の成果を踏まえて欠点を克服することが展望されている。この点では、本書は部落差別の問題を部落固有の問題として取り扱うのではなく、社会の差別者・被差別者の関係、福祉や教育などでの行政組織、政治組織の関与などの政策・運動の

変化、その思想的影響などひろく部落史研究を超えた範囲を対象としている。

本論は、部落問題の変質をもたらした三つの時代を画期にして論述される。

一八八九年の帝国憲法発布前後の、部落問題の近代の再編と差別撤廃の端緒とされる時期を扱う第一部では、大阪西浜に地域を絞って皮革業関連の経済活動の生き残りの努力と政治の面での民権運動の展開が扱われる第一章「近代西浜の誕生と部落問題」があり、第二章「大同団結・帝国議会開催と西浜」では、大同団結運動から初期議会の全国的な動きの中で西浜部落の動きが分析される。地域住民の組織化とともに、東京から追放されたのち西浜に根拠地を定め活動する中江兆民の活動・思想も詳しく触れている。第三章「社会問題の定着と部落の教育・経済状況」では、資本主義の発展で貧富の格差の明確化にともない、部落問題が社会問題の一つとして浮上り、議会においても救貧法制定の議論が交わされること、さらに大阪府・奈良県などの教育行政の中で「特種部落」の呼称が先駆的

に使われたことが確認される。

第二部は部落問題の確立期として一九〇〇年前後の社会的状況と政府の対策が分析される。第一章「世紀転換期社会と部落問題の成立」は大阪の西浜での皮革業・屠畜業が日清戦後も経済的地盤を確保し、全国的な同業組合組織化にも発言権を増した。部落・非部落を超えた仲間組織化が広がる一方、社会的忌避が浸透する。文明化の実現とそのためにも部落問題解消が主張されだす。こうした社会の変化に対応して内務官僚を中心に貧民研究会が作られ、感化法や精神病者監護法などの社会行政立法が模索される。小学校令改正では未就学状態を追認する。被差別民を中心に大日本同胞融和会が大会開催に持ち込むこともできた。この中で強調されだすのは被差別民を含めた貧民の「怠惰心」であり、弱者救済のための天皇神聖視を背景とする皇室福祉であったことが第二章「部落対策の始動と『特種（殊）部落』観の定着」で語られる。第三章「地方改良期の教育状況」では、日露戦後に国民の再統合を図る意図を持った地方改良運動が取り上げられる。学校や青年

層を対象とする教育行政が京都・大阪・兵庫などを実例として紹介される。犯罪と不衛生の温床としての部落像が打ち立てられ、この虚像に基づいた細民部落改善協議会が中央で開かれる。

地方改良運動の展開自体、日露戦争期から潜在した非戦論・社会主義、私小説・自然主義小説の政治的無関心、大衆消費的娯楽などの青年層への浸透を予防することを目的の一つとしていた。韓国併合が行われる一九一〇年前後には、アナキストされる幸徳秋水グループが天皇暗殺を企てたとして検挙・処刑される大逆事件が発生する（フレイムアップされる）。その後には、福祉に関連する施策として、天皇の下賜金を呼び水にした恩賜財団済生会が創設され、貧病人への施療券の配布が行われる。第三部では、大逆事件から大正初期の政治史的には大正政変（第一次護憲運動）、政治思想的には大正デモクラシーの前期に当たる時期に焦点を当て、こうした政治・社会の変化の関連で部落問題が取り上げられる。

まず、第一章「大逆事件と融和対策の展開」では、大逆事件の関

係者に部落関係者がいたことから、帝国議会でも部落対策が論じられ、政府でも融和政策が推進される契機となった。官製の施策に対しては被差別の有力者層を中心に結成された大和同志会が皇国民としての自覚や差別の解消の観点から支持はするが、その前提として部落

民の自覚が強調された。政府の意を体して国民の融和を強調する帝国道会会の主張と部落民の自覚を前提にする大和同志会の期待は合致しない点があった。政府・地方行政の融和政策と被差別民を中心とする融和運動の連携と齟齬は第二章「洞村移転の思想的相貌」で、さらに検討される。奈良県橿原神宮の神域保護のため高台に位置する洞村の移転が計画され、一九一七年に県知事への移転請願を認められたら二一年までに全村が八百メートル東北に移転した。この経緯を分析することで、被差別民が政府の方針を支持したのでなく、「一君万民の理念性を楯に、国民化による差別撤廃の要求を政策批判・社会批判を伴う形で展開した」「国民化の内部革新運動」とした（一七頁）。最後の第三章「工場法と大阪市の夜学」と第四章

「大正期部落の教育状況と青年」では、前者は大阪市の夜学にあらわれた差別構造を指摘し、後者は京都・大阪・兵庫を中心とした青年団の組織化の中で、部落差別の廃止を求める多様な動きの可能性を摘出している。

八箇さんは、部落史の研究成果を踏まえて、お得意の教育史や、解放運動に関連する民権運動や社会主義運動などにも視野を拡げ、構築主義的な社会史や社会福祉の歴史にも眼を配るのを忘れていない。それは、病む社会の問題として部落問題をとらえるという八箇さんの視点と目的から要請される観点であると思われる。研究者の関心と方法が専門化・個別化し、細かいテーマを扱う論文が多産される現状を考えると、八箇さんの領域を超えた研究と論述の方法は重要である。逆に、個別の専門領域にあっても、当然に部落問題との関係を追及すべき対象を取り上げた論文・著書に部落問題が取り上げられない場合が多い。本書で取り上げられた中江兆民研究の中で、兆民と部落問題のかかわりが八箇さんと同じような情熱で語られるようなことはない。八箇さん

がややというよりほぼ全面的に否定的に評価されている留岡幸助の研究についても同じことが言える。留岡幸助については、非行少年の更生施設家庭学校を設立した社会福祉の先駆者としてあるいは八箇さんの専門領域でもある教育史の中でも研究が重ねられている。

顕彰的色彩の強い留岡論を批判する二井仁美著『留岡幸助と家庭学校』でも、留岡の非行少年の教育論の前提として無視しえない部落問題とのかかわりについては注の中で藤野豊氏の論文を例示するに留まっている。藤野論文が留岡を内務官僚の代弁とする評価は二井論文の立場を支持するものとは思われないのである。社会事業史の分野では留岡と同様内務省嘱託の生江孝之（本書では『社会事業綱要』が引用されている。二五八頁）、京都府の融和政策の嘱託を勤めた海野幸徳、法制史では窪田静太郎などが研究されているが、部落問題との関わりにふれたものは少ない（杉山博昭「生江孝之の社会事業観」の「二、部落問題認識について」同著『キリスト教福祉実践の史的展開』所収がある）。こうした現状を考えると、本書は関連

する分野の研究者にもひろく読まれる必要があるし、価値があると思う。

本書は社会・国家の病として部落差別などの社会問題が捉えられている。病が治る自生的な可能性と治す努力の当事者の主体性への著者の期待を感じ取ることができ、社会と国家に対する無条件の肯定というより、差別撤廃に向けた被差別民自身の努力や、それをサポートした非部落民の熱意に対する期待が表れている。本書は人物研究ではないので、深くは追及されてはいないが、民権理論家として大阪西浜に一時寄留し、被差別民衆との交流の中でそこから立候補して衆議院議員にも当選した中江兆民、岡山の被差別部落に生まれて二〇世紀初頭に、差別撤廃を目指す備作平民会を組織化し、社会主義団体「岡山いろは俱樂部」や日本社会党にも関与したという三好伊平次などについては、もう少しまとまった言及があっても良かったし、八箇さん自身も、特に論じ足りないとの思いを持ったに違いない。思想的研究の面からも、八箇さんの中江論や三好論あるいは、八箇さんはあまり好きに

なれない留岡論が必要だと思う。本書が、政策と運動と構造の分析に傾いていて、思想分析を欠いたため、世紀末から大正期の思想史（教育・社会）の多様な展開と可能性との接点は深められていないように思える。社会運動・政治思想レベルの自由民権から社会主義・民本主義への枠組みにとどまっている。

本書では、部落問題を社会・国家の病と結びつけ、その改善を求める社会福祉の分野の重要性が指摘され、その実態が分析される。この辺りは、先に触れた逆のことが指摘される。社会福祉の歴史を研究するものが部落史について正確な知識を欠くのと同様（私もそうであるが）、他の分野の専門家が社会福祉の成果を吸収する場合は、間違いではないかもしれないが、偏見といったものが、八箇さんの著作にも散見される。

八箇さんは世紀転換期の部落問題の確立を、内務省を中心とした救貧法案策定の挫折と結びつけて述べている。この時期に確立したという戦前日本の慈善事業の基本構造は「皇室下賜金を中心とした慈善を救済の基本と位置づけ、内

務省の制限的公的救済がそれを補完する」と説明している（二三四頁）。これは、天皇制の慈善的な側面を強調しすぎている。天皇の下賜金が補完であろう。八箇さんは遠藤興一著『天皇制慈善主義の成立』から官金救済と慈善救済の割合は圧倒的に慈善救済が高いことを示す資料を挙げている。一九〇八年に井上友一が策案したとされる通牒「救貧恤窮ハ隣保相扶ノ情宜ニ依リ互ニ協救セシメ国費救助ノ濫給矯正方ノ件」で従来二〇万円の恤救規則の国庫負担が六万円余に激減したとする。これらは事実である。しかし、社会行政に関連するのは恤救規則の費用に限定されない。一九〇九年に恤救規則への国庫負担は激減したが、福祉関連の施設奨励助成費四万円、府県感化院の設立義務化に伴う国庫負担などが出されて減額の割合を少なくした。感化救済事業講習会の開催もその一環である。勿論すべてを天皇制慈善主義と理解することは可能ではあるが、八箇さんの融和運動の中にある自主的差別撤廃の可能性を認める視座は、社会福祉の分野においても当てはまるのではないか。

部落問題は八箇さんの著作で述べられているように、世紀転換期に内務省が管轄する貧困と治安対策の社会行政の中に含みこまれることになった。被差別部落はすべてが貧しいわけではないという点で、貧民対策とは違う性格を持っている。同時期には人類学や民俗学の関心から異民族説や、穢れ意識と結びつけられて、差別の根拠が語られていく。また、福祉の対象とされた貧民は怠惰で群衆的である点で自主的に改善する可能性が少ないとみなされたままであったのに対して、被差別部落民は融和運動やさらに水平社運動という自己解放とアイデンティティの自覚（人間性の覚醒・内部自覚）する主体性を確立していった。「病む社会・国家」を多様に分析するためには、部落問題や貧困問題、少年非行の問題などそれぞれの違いを含みながら、同時代の問題だという共通性も存在すると思われる。それぞれの対象分析についても、差異を認めつつもそれぞれの研究成果を理解・利用していく必要を、本書を通して一層、感じさせられた。

（解放出版社、二〇一二年一月刊、八四〇〇円）

在野の融和運動家・植村省馬（三）

吉田文茂

（高知県部落史研究会）

これまで二回にわたって、自主的な部落差別撤廃運動に取り組んだ高知県出身の植村省馬（以下、省馬と略す）の生涯を紹介してきた。今回は、高知県を起点に四国から兵庫県、そして東京、全国へとその活動範囲を広げていった省馬がその活動を通じて出会った人びと、各地で活動をおこなったこともあって、省馬の交友関係は広く、出会った人びとの数は膨大であったと考えられるが、省馬は出会った人びとの葉書や封書、さらには名刺を大切に保管しており、現在それらの資料（植村資料と呼ぶ）は高知市立自由民権記念館に寄贈されている。

政治家、軍人、官僚、警察官、水平運動・融和運動関係者、皮革業および武道具関係者、針灸関係者などさまざまな人びとが含まれるが、その多くは省馬が東京に居るかまえて以降のものである。省馬は出会った人びとから受け取った名刺を、名前や住所、肩書などの記された箇所のみ切り取って保管しているため、なかには名刺かどうか判別しづらいものも含まれている。さらに、名刺に交じって、葉書の名前と住所の部分のみが切り取られているものや、名刺ほどの大きさの紙に名前と肩書き、住所などが省馬自身の筆によって記されているものも相当数ある。

興味深いのは、一部の名刺に省馬自身によるその人物に対する評価がメモされていることである。基本的には被差別部落民に対しては「同士」、部落外の関係者に対しては「リカイ者」と記しているが、なかには「インチキ者」や「セキニンカンノナイ方」、「大物」、「恩師」などの大胆なコメントが付されているものもあり、それらの人物と省馬とがどのような関係であったのかを想像させてくれる。

今回は、それらのなかで、水平運動関係者と融和運動関係者に絞って交友関係を探ってみることにしたい。ここで、水平運動家と融和運動家とせずに水平運動関係者と融和運動関係者としたのは、省馬が出会った時点では水平運動や融和運動から離れている人や運動家として省馬に接しなかった場合も考えられるからである。なお、水平運動関係者と融和運動関係者の名刺はそれぞれ表1、表2にまとめてあるので参照されたい。また、以下の関係者の略歴は『部落問題・人権事典』（部落解放・人権研究所、二〇〇一年）に依拠していることを断っておきたい。

十 省馬と交友のあった水平運動関係者

水平運動家と確認できる人物の名刺は、表1の如く二六枚あるが、葉書は松本治一郎、深川武、田中佐武郎、富岡募、山下友枝、猪原久重の六人七通しかなく、それほとんどが賀状や暑中見舞状であり、差出人の近況を知ることのできるのには山下のもののみである。

松本治一郎（一八八七～一九六六）からの葉書は一九三七年一月四日の消印のある賀状で、松本の住所は福岡市吉塚駅前となっている。すでに衆議院議員となっている時期のものであるが、省馬と松本の交友がどの程度であったかは判然としないものの、正月の挨拶状をやり取りする程度の関係であったということはわかる。また、「代議士」と省馬のメモがある松本の名刺も残っているが、そこには松本の肩書（所屬）については何ら記載がないことから、松本が議員になる前に名刺交換をしたとも考えられる。松本と同じ福岡県の関係者では、ほかに井元麟之や田中松月、藤原権太郎、田原春次の名刺が残されている。藤原が県会議員に繰上当選したのは一九三六年、田原が衆議院議員に当選したのは一九三七年、また田中が全水中央委員に選出されたのは一九三五年であることから、省馬がかれらと関わりを持つようになるのは一九三〇年代後半の時期であったと言える。

東京府水平社の中心的な活動家であった深川武（一九〇〇～一九六二）からの葉書は一九三六年の賀状である。三重県伊賀水平社結成にかかわり、一九三二年から四年間

表1 水平運動関係者の名刺

	氏名	肩書(所属)	住所	省馬のメモ
1	糸若 柳子	長安堂鍼灸療院副院長	大阪府南河内郡埴生村向野 大阪鉄道高鷲駅南15丁	
2	猪原 久重	浴光会主事 国分寺病院事務長	病院 東京市外国分寺村恋ヶ窪568番地 自宅 東京市杉並区高円寺3-218	同士
3	井元 麟之		東京市赤坂区表町1-8 松本治一郎事務所	同士
4	上田 音市	松阪市会議員		
5	岸本 順作	兵庫県方面委員	神戸市葺合区南本町通4丁目	同士ノハナセル方
6	北原 泰作			
7	坂本 清作	日本水平社中央委員 群馬県融和会理事 群馬県社会教育委員 人類愛編纂者	自宅 群馬県邑楽郡大川村	
8	坂本 清作	日本水平社中央委員 群馬県水平社執行委員長 人類愛編纂者	本部 群馬県新田郡太田町 自宅 群馬県邑楽郡大川村	
9	清水 喜市	県清和会委員 村会議員 学務委員		故
10	田中 佐武郎	村長	三重県阿山郡城南村	同士 大インチキ者
11	田中 松月	全国水平社中央委員 同九州地方協議会書記長	福岡県嘉穂郡碓井村西郷	
12	田中 松月	松本組	福岡市吉塚駅前 松本治一郎方	
13	田原 春次	衆議院議員	社会大衆党本部 東京市芝区櫻川町7	同士 大物
14	富岡 募		熊本県菊池郡菊池村	本庄閣下書ヲ呈シタル方
15	中村 正治	全国水平社中央委員 全水香川県聯合会執行委員長	香川県綾歌郡西庄村 高松市内町197	三十円カラレル
16	野崎 清二	日本建設協会	四谷区三光町48神沢方 岡山県久米郡三保村	大物
17	原口 幸一	県北男女青年融和聯盟常務理事	「人間愛」発行所 広島県三次町	
18	平野 小劔		本部 牛込区原町1-49 内外更始倶楽部	故
19	藤原 権太郎	福岡県会議員	福岡市明治町中4丁目	同士
20	松本 治一郎		福岡市吉塚駅前	代議士
21	南 梅吉		麹町区4丁目福四萬館内	
22	宮本 熊吉	全関東水平社中央委員 全関東融和促進同盟常任委員	埼玉県熊谷市上之382	イハカゲンノ者
23	村岡 静五郎	全関東部落民全体会議 議長	群馬県山田郡蕪川村大字東金井331	大物
24	森 利一	全国水平社中央委員 同埼玉県聯合会執行委員長	自宅 埼玉県川越市外野田 関東地方協議会 東京市浅草区今戸1-9 総本部 大阪市浪速区栄町4-22	セキニンカンノナイ方
25	山口 静	太鼓生皮商 群馬県融和会理事	自宅 群馬県太田町大門通り	同士
26	山口 静	群馬県融和会理事	事務所 県庁社会課 自宅 太田町大門通891	

※あいうえお順に並べた。空白は名刺に何も記されていないということである。同一人物の名刺が複数ある場合もそのまま掲げた。

城南村村長をつとめた田中佐武郎（一九〇〇～一九九三）からの葉書も賀状であるが、田中に対する省馬の評価は厳しく、名刺同様に賀状にも「インチキ村長」の文字が付されている。全国水平社熊本県連の二代目委員長をつとめた富岡募（一八九三～一九六四）の葉書は一九三五年七月三十一日消印の暑中見舞いで、「同志」と記されている。単に被差別部落のなかまという意味では「同士」という言葉を使用していることから、同じ志を持つなかまとして富岡に接していたのではなかるうか。また、富岡の名刺はすべて手書きであるが、そこには「本庄閣下書ヲ呈シタル方」と記されていることから、本庄繁（陸軍大将）の揮毫した書を贈呈したものと思われる。

山下友枝（一九〇一～一九七九）は愛媛県において融和運動を出発に一九三〇年代なかばには水平運動に参加し、戦後は部落解放同盟愛媛県連合会の委員長もつとめた人物で、一九三二年一月二日消印の葉書が一通残っている。省馬資料のなかの葉書は圧倒的に男性からのものが多く、しかも賀状や暑中見舞いが大半のため、印刷された挨拶文のみ記されている場合がほとんどである。逆に、女性

からの葉書は少ないものの、手書きのものも相当数交じっており、山下の葉書は当時の彼女を取り巻く状況を知ることのできる貴重な資料でもある。全文は次の通り。

先生上京の際御眼に掛りての印象が深く刻み込まれ眼光紙底に透ると申し舛か熱烈なる御言葉に引附けられ唯々感激するはかりです。先生兄弟姉妹の薄幸に一日も早く明るい世界の訪れる様只一人でもよい、真剣の叫びを上げて下さい。無知な大衆を呼び起して下さい。我々わ実に血と涙の連鎖で有舛。悩み藻掻く兄弟姉妹の有謂苦悩を身に体し戦って下さい。御指導下さい。後日また。

省馬と山下のかかわりがどの程度であったかは不明で、この葉書以外に二人の交友関係を推し量るすべはないが、少なくとも山下の省馬に対する尊敬の念を読み取ることは容易であろう。なお、山下はこの後、地元において水平社結成をめざすこととなる。

猪原久重は大分県出身で衡平社大会に出席したことで有名であり、小犬丸裕「朝鮮の被差別民衆と大分県人」（『おおい部落解放史』第

八号、一九八九年）に猪原の略歴が記されている。それによると、猪原は一九〇四年三月一日生まれで同志社大学中退後、一九二四年猪原二一歳の時に水平社の活動家として衡平運動に参加したとある。その後は、国立国分寺結核療養所の理事長をつとめ、一九五一年二月一日死去したとのことである。

一方、猪原の名刺（水平社博物館も猪原の名刺を所蔵しているとのこと、小犬丸論文も含め猪原に関しては同博物館の駒井忠之氏に「教示いただいた」）には「浴光会主事」「国分寺病院事務長」と肩書が記されており、「療養所」と「病院」、「理事長」と「事務長」などの点に違いはあるものの先の経歴を裏付けている。病院の住所は東京市外国分寺村恋ヶ窪五六八番地、自宅の住所は東京市杉並区高円寺三二一八となっている。社会福祉法人浴光会のホームページによると、国分寺病院の設立は一九三七年八月三日であることから、省馬が猪原の名刺を受け取ったのは、それ以降のことと考えられる。猪原については、名刺以外に一九三六年と三七年の賀状が残っており、国分寺病院設立以前から二人の間に交流があったことがうかがえる。賀状

の猪原の住所は東京市世田谷区池尻三九九番地となっており、病院設立に伴い、病院近くの高円寺に転居したものと考えられる。なお、猪原の名刺に省馬は「同士」と記していることから猪原の経歴についても多少は知っていたものと推測できる。また、猪原に関してはもうひとつ、「聖旨奉賛会会長」と「昭和授産協会理事」の肩書の記された名刺の一部に「猪原久重」の名と「世田ヶ谷区羽根本一七九三」の住所が手書きされたメモが残っている。おそらく、省馬が自分自身の名刺の横に猪原の名前と住所を記し、それをメモとして切り取って残していたものと考えられ、猪原が同じ世田ヶ谷区ながら別の住所に住んでいたことをうかがわせる。

名刺のみの水平運動関係者のなかで注目したいのは糸若柳子（二八九〇～一九八四）である。省馬資料の二五〇〇点に及ぶ名刺のなかに女性の名刺の占める割合は一概にも満たず、水平運動関係者においては唯一糸若のもののみである。糸若の肩書は「長安堂鍼灸療院副院長」となっているため、省馬との結びつきは水平運動家としてではなく、鍼灸でのつながりによるものと考えられ、そうすると糸若が水平運動から離脱してから後に

表2 主な融和運動関係者の名刺

	氏名	肩書(所属)	住所	省馬のメモ
1	赤堀郁太郎	内務省社会局嘱託 財団法人中央融和事業 協会常務理事	勤務先 東京市麹町区大手町1丁目7番地 自宅 東京市杉並区上萩窪町939番地	恩人
2	安藤専哲	埼玉県社会事業主事	自宅 埼玉県浦和市 埼玉社会館公舎	大恩人
3	安藤寛	静岡県庁社会課	静岡市大岩町2-13	恩人
4	伊東茂光	京都市崇仁校長		大リカイ者
5	伊藤末尾	社団法人 聖訓奉旨会 常務理事	東京市赤坂区氷川町33番地	大恩人
6	植木俊助	神奈川県庁社会教育課 社会事業主事兼社会教育 主事	神奈川県中郡秦野町曾屋	大人物 リカイ者 ヨウリヨゴイ
7	内海正名		兵庫県揖保郡越部村仙正184	同士 村長 第一人者 先日本一人
8	岡本彌智夫	和歌山県社会課内同和 会嘱託		日本第一人者 ノ子
9	河上正雄	大阪府学務部社会課 社会事業主事	大阪市住吉区北田邊町58-2	同士
10	管誠壽		松山市持田町193番地(側候所東)	恩師
11	喜田貞吉	京都帝国大学講師 東北帝国大学講師 文学博士		大人物
12	河野亀市		広島県雙三郡三良坂町	同士大人物
13	阪口眞道	京都府親和会主事 京都府社会課		ユウカンナ同 士
14	田中邦太郎	財団法人中央融和事業 協会	東京市麹町区霞ヶ関3丁目同潤会館内	恩人
15	成澤英雄	信濃同仁会主事		勇かん
16	濱平寅次		高知県幡多郡三崎村	コーロウ者
17	藤野恵	社会局事務官兼社会局 書記官		リカイ者
18	松本幸	帝国公道会幹事	芝白金三光町276	太ガイノ者
19	山本正男		東京市世田谷区経堂町442	同士ノ大物
20	吉川吉治郎		奈良県大正村	ヨウリヨウノイ イ方

※あいうえお順に並べた。空白は名刺に何も記されていないということである。同一人物の名刺が複数ある場合は一つにまとめた。

知遇を得たということになるのである。
 その他の水平運動家で省馬の評価が高いのは村岡静五郎(二八七二〜一九四八)と野崎清二(一八九六〜一九六二)、田原春次(一九〇〇〜一九七三)の三人である。「全関東部落民全体会議議長」の肩書の村岡は「大物」と評価され、「日本建設協会」所属の野崎清二も「大物」、「衆議院議員」の肩書の田原は「同士、大物」と、三人ともそろって大物との評価を受けている。なお、田原の住所は社会大衆党本部のあった東京市芝区桜川町七となっており、衆議院議員に当選した一九三六年以降の名刺と考えられる。一方、評価が低いのは、前述の田中佐太郎を含め、中村正治、宮本熊吉、森利一らの活動家で、省馬からの信頼感はまったくなかったと言える。ただ、あくまでも省馬が自身の個人的感情をメモとして記したものであって、省馬の評価がそのままその個人の客観的評価に結びつくものでないことは言うまでもない。

十一 省馬と交友のあった融和運動関係者
 主だった融和運動関係者のなかで、省馬の評価が記されている人

物を列挙すると表2のとおりであるが、これらの人びとのなかで葉書が残っているのは吉川吉治郎一通、内海正名二通、菅誠壽二通の三人、五通である。一九三六年と三七年の正月の賀状であるが、そのなかで菅のものは印刷物ではあるものの、近況も記されている。三六年の賀状には挨拶のあとに、「年頭所感」として、ハイネの冬の歌の一節を引用しつつ、「不肖なる自分としては平凡の中に常に為すべきことを為し務むべきことを勉め、総ての勤行に於て今日は今日が大切であり、今月は今月が大切であり、今年が今年が大切であつて、明日を待ち来月を待ち来年を待つことは禁物とせなければならぬ」と新年の抱負を記している。また、翌一九三七年の賀状では、昨年四月に退職して悠々自適の生活を送っているが、耳順を過ぎて心身ともに健康であるため、「内外共に容易ならざる非常時局に直面し国民をして苟且偷安を許さぬ」状況のもとでは、微力ながらも「何か適応の御奉公をせねばならぬ」と決意の程を記している。

○年の年賀状が一通残っているが、そこには「昨臘左記に移転」として「東京府荏原郡玉川村奥澤四二五」の住所が記されている。三好との関係はけっこう古く、少なくとも一九二五年の時点ですでに知り合う仲となっていた。植村資料に一九二四年一月の高知洋服裁縫学院への寄附金募集趣意書などを綴じた書類があり、そのなかに一九二五年五月の今井兼寛と三好伊平次連名の紹介書が含まれている。中央社会事業協会地方改善部用紙の罫紙一枚に書かれたものであるが、筆跡から三好の筆になると考えられる。文面は「植村省馬君は高知県の志士なり」ではじまり、洋服裁縫学院が経営難に陥っていることに触れたのち、省馬への援助の要請で終わっている。省馬の活動が高く評価されており、かなり早い段階から省馬の一連のとりくみが中央にまで届いていたことを物語っている。

また、これも表2にはないが、女性融和運動家の名刺や葉書も残っている。久保つるからの一九三三年の賀状は日頃の高配への感謝と今後の指導を期待する文面となっているし、木津清子や鈴木珠子の名刺も残っていることから、久保・木津・鈴木といった婦人融和運動の指導者三人とも交遊関係があったことが確認できる。

表1と表2を比べてみると、融和運動関係者に対する批評には「大物」や「大人物」、「大リカインシャ者」、「コロウ者」など高く評価する言葉が並んでいるが、水平運動関係者に対してはそれほどでもないことがわかる。省馬自身の運動へのスタンスもあるのだろうが、水平運動関係者でも高い評価を受けている人物がいることから、少なくとも省馬にとつては信頼に値する人物は融和運動関係者に多かったということになるであろう。

十二 植村省馬への評価

省馬が亡くなる直前の一九五四年六月に、省馬の生涯を辿った『植村省馬翁』が高知県友愛会の手で刊行されている。これは省馬と親交のあった風辺寿太郎の提案によって当時の部落解放団体のひとつであつた高知県友愛会が刊行を決定し、民俗学者で高知県友愛会幹部の橋詰延寿がまとめた一〇二ページの冊子である。省馬所有の資料を活用し、さらに省馬と親交のあつた人びとの思い出を挿入して、省馬の生涯を概括的に記しており、省馬という人物像を浮かび上がらせることに成功している。(一)でも紹介した溝淵信義は敗戦の直前に省馬を訪問した際、病気で臥床していた省馬が駅まで見送りに来てその別れ際に言った「後輩をたのむ」との言葉に、「翁(省馬のこと・筆者)が棺に片足を踏み入れながらもなお後輩のため心配していること、自分が如何に貧困の中にありながらなお少数同胞の身の上を思うことに感激」して、車中では涙がとめどもなく出たと回想している。

その『植村省馬翁』に、一九三三年秋省馬が職業補導のために静岡県を訪問した際に、当時の静岡県社会課長の染筆した七言絶句が掲載されている。省馬に対する評価として興味深いので、最後に転載する。なお、『植村省馬翁』の著者である橋詰は「映画王チャップリンと翁(省馬のこと)を対照し、両雄の飄逸の背後にある哀愁を歌つて妙」と記している。

茶 風 鈴 映 画 王 者
植 村 生 融 和 先 覺
兩 雄 飄 逸 樂 喜 劇
誰 知 彼 此 哀 愁 裏
昭 和 八 年 晚 秋
澄

部落差別がなくなる日を信じて 日本基督教団部落解放センター30年の歩み 東谷誠

部落解放 671 (解放出版社刊, 2013. 1) : 630円

特集 近代部落と政治活動

代議士時代の森秀次 北崎豊二／大阪・西浜部落と沼田嘉一郎 吉村智博／田原春次 マイノリティの声を代弁した大衆政治家 辰島秀洋

部落も部落差別も知らないメディア 週刊朝日の橋下氏報道 臼井敏男

本の紹介 徐阿貴著『在日朝鮮人女性による「下位の対抗的な公共圏」の形成—大阪の夜間中学を核とした運動』

川瀬俊治

水平社論争の群像 2 全国水平社創立 朝治武

部落解放研究 196 (部落解放・人権研究所刊, 2012. 11) : 1, 400円

特集 部落における青年の雇用と生活 (上)

全国部落青年の雇用・生活実態調査結果 1 総論 福原宏幸／2 量的データの特徴 内田龍史／3 就労実態 福原宏幸／4 女性の労働 齋藤直子

解放子ども会改革検証のために 高田一宏

部落の識字学級を「居場所」として捉え直す 2011年度全国識字学級聞き取り調査から浮かぶ現状と「しきじ」の課題 菅原智恵美・森実

2011年度CSR報告書における人権情報 人権CSRガイドラインの好事例 菅原絵美

大阪市西成区あいりん地域の施策の系譜と現状 「あいりん地域の現状と今後」報告書より 水内俊雄

「アイヌ民族の学習」をすすめるために 西村浩充

反差別国際運動インターナショナル・レポート 国連人権理事会・人種差別撤廃委員会に参加して フローレンス・シャオ

部落解放研究くまもと 64号 (熊本県部落解放研究会刊, 2012. 10)

全国水平社創立大会宣言—受け継いだところ・伝えた魂 守安敏司

原口頼雄先生を偲んで

大学における人権教育の取り組み：熊本学園大学から 花田昌宣／原口頼雄さんと部落史研究—福岡部落史研究会と原口さん— 竹森健二郎

部落解放ひろしま 92号 (部落解放同盟広島県連合会刊, 2013. 1) : 1, 000円

特集 「戸籍の大量不正取得事件」を考える

部落問題研究 202 (部落問題研究所刊, 2012. 9) : 1, 111円

ベンサム・「法と経済学」・三浦判決—「泉南アスベスト裁判」大阪高裁不当判決に直面して— 半田秀男

摂津西宮神社における神職争論と支配 志村洋

史料紹介 『北海道移民実状調査』 (部落問題研究所三好文庫) 大藪岳史

ライツ 163 (鳥取市人権情報センター刊, 2012. 12)

今月のいちおし! 『途中下車』 (北村森著) 田中澄代

LRG ライブラリー・リソース・ガイド 創刊号 (アカデミック・リソース・ガイド刊, 2012. 11) : 2, 500円

特集 図書館100連発

未来の図書館を作るとは 長尾真

リベラシオン 147 (福岡県人権研究所刊, 2012. 9) : 1, 000円

特集 追悼 原口頼雄

史料紹介 新聞に見る部落問題関係史料 8—『全九州水平社史料集(仮)』草稿より— 旧『全九州水平社史料集』プロジェクト

資料紹介 生活の柄 65—『近世民衆史の泉』改め— 竹森健二郎

リベラシオン 148 (福岡県人権研究所刊, 2012. 12) : 1, 000円

特集 同和教育の遺産と教訓

林力は部落問題・「同和」教育とどのように出会ってきたのか 林力, 板山勝樹／「同和」教育推進者が形成される「転機」—林力のライフストーリーを事例として— 板山勝樹

『週刊朝日』記事「ハシモト」をめぐる ※メールマガジン「メディアウオッチ100」より転載 石瀧豊美

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 13 『ターヘル・アナトミア』の原本—福岡藩の蘭学と解剖 6 — 石瀧豊美

史料紹介 新聞に見る部落問題関係史料 9 —『全九州水平社史料集(仮)』草稿より— 旧『全九州水平社史料集』プロジェクト

資料紹介 生活の柄 66 —「近世民衆史の泉」改め— 竹森健二郎

図書紹介 『河原ノ者・非人・秀吉』 (服部英雄著) 岩成俊策

ルシファー 15 (水平社博物館刊, 2012. 10)

2011年度公開講座報告

大和同志会と融和運動—全国水平社創立前夜— 手島一雄／これからの部落解放運動をどう考えるか 伊藤満

12.11.15) : 150円

第8回地域人権問題全国研究集会記念講演 歴史研究と部落問題の解決 1 鈴木良・奥山峰夫

地方史研究 359 (地方史研究協議会刊, 2012.10) : 1, 200円

大阪人権博物館及び大阪国際平和センターの維持を求める要望書

であい 606 (全国人権教育研究協議会刊, 2012.9) : 150円

人権のまちをゆく 64 中華街のくらしに触れて

人権文化を拓く 180 脱原発運動のこれから—集会とデモと法律制定運動— 鎌田慧

であい 607 (全国人権教育研究協議会刊, 2012.10) : 150円

人権文化を拓く 181 震災後の学生の言葉から 大森直樹

であい 608 (全国人権教育研究協議会刊, 2012.11) : 150円

人権のまちをゆく 65 水平社博物館周辺フィールドワーク

人権文化を拓く 182 「国籍」と「人権」どちらが重要か? 陳天璽

ヒューマンJournal 202号 (自由同和会中央本部刊, 2012.9) : 500円

部落解放運動四十年を振り返って5 「被差別至上主義」の魔力 灘本昌久

ヒューマンライツ 295 (部落解放・人権研究所刊, 2012.10) : 525円

いま、水平社宣言の現代的意義を考える 下 友永健三

ヒューマンライツ 296 (部落解放・人権研究所刊, 2012.11) : 500円

走りながら考える 135 『週刊朝日』の差別記事と公募区長の差別論文—被害者は橋下徹大阪市長だけか— 北口末広

ヒューマンライツ 297 (部落解放・人権研究所刊, 2012.12) : 525円

『週刊朝日』記事と橋下大阪市長の対応について 池上豊

ひょうご部落解放 146 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2012.9) : 700円

特集 学ぶ権利を守るために

大学区制に突き進む兵庫県教育行政の本音—差別・選別教育を正当化し小規模高校廃校を狙う 吉田豊/定時制生徒に犠牲を強いる伊丹市立高校(定時制)の募集停止と在校生の一举移転 北川早苗/兵庫の夜間中学校 草京子/人権教育の再点検を 細田勉/外国人の子どもの教育相談から 辻本久夫/インタビュー 教育の機会均等を—朝鮮高校無償化適用除外から2年半

被差別部落の女性インタビュー 3 葛藤を乗り越え、家族がつながる 杉本藍さん

連載 牛から命を学ぶ 2 皮から革へ—糠なめしを学ぶワークショップ 阿久澤麻理子

映画の紹介 「隣る人」 高吉美

本の紹介

『水平社宣言の熱と光』(朝治武/守安敏司編) 八箇亮仁/『日本代表・李忠成、北朝鮮代表・鄭大世 それでも、この道を選んだ』(古田清悟, 姜成明著) 橋田圭代

部落解放 668 (解放出版社刊, 2012.10) : 630円

特集 橋下「改革」を問う 人権問題を中心にして

本の紹介 「人間が神にかかわらうとする時代」を 同和教育振興会編『講座 同朋運動—西本願寺教団と部落差別問題 第1巻』を読む 寺澤亮一

なぜ生活保護がたたかれるのか? まな板に載せられているのは私たち自身の生活 小久保哲郎

「戦後」いまだ終わらず(下) 韓国での強制連行・強制労働被害者聞き取り調査に参加して 川瀬俊治

まちかどの芸能史 20 芸能から見る近世 村上紀夫

部落解放 669 (解放出版社刊, 2012.11) : 630円

特集 部落問題と宗教者 水平社から戦後にかけて

三浦参玄洞と全国水平社 『中外日報』の主張を中心に 秋定嘉和/一如会の歴史と梅原真隆 神戸修/部落解放運動に献身した朝鮮人仏教者 朝野温知(李壽龍)の歩み 水野直樹/キリスト教と部落問題 田中和男

本の紹介 解放運動は何を問いかけたのか 友常勉著『戦後部落解放運動史—永続革命の行方』 山本崇記

連帯してヘイト・クライムと闘う 水平社博物館差別街宣裁判に勝利 部落解放同盟奈良県連合会

浮き彫りになった身元調査の裏ネットワーク プライム事件の経過と課題 片岡明幸

発達障害と排除型社会 大阪地裁における発達障害者への差別判決について考える 大久保圭策

部落解放 670 (解放出版社刊, 2012.12.10) : 630円

特集 法人を活用した地域活動 2

「ぼちぼちいこか」京都府井手町の「おいで(井手)やす ふれあいの集い」 特定非営利活動法人やましろ人権Fネット

本の紹介 『あるロマ家族の遍歴—生まれながらのさすらい人』(ミシヨ・ニコリッチ著 金子マーティン訳) 友永健三

資料 『週刊朝日』(2012年10月26日号)掲載記事「ハシタ 奴の本性」に関する抗議文 部落解放同盟中央本部執行委員長 組坂繁之

水平社論争の群像 1 なぜ「水平社論争の群像」か 朝治武

in Japan (New York:Cambridge University Press, 2010)

松田利彦

追悼・古庄正先生

狭山差別裁判 434号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2012. 5) : 300円

狭山現地調査のてびき

人権21 調査と研究 220 (おかやま人権研究センター刊, 2012. 10) : 650円

特集 新しい時代の社会活動家たち

人権と部落問題 835 (部落問題研究所刊, 2012. 10) : 630円

特集 子どもの人権

文芸の散歩道 生活派短歌の新風—宮壺忠夫の群馬新興短歌社 秦重雄

人権と部落問題 836 (部落問題研究所刊, 2012. 11) : 630円

特集 地域と人権

本棚 沖縄人権協会編著『戦後沖縄の人権史 沖縄人権協会 半世紀の歩み』 西尾泰広

人権と部落問題 837 (部落問題研究所刊, 2012. 12) : 630円

特集 高齢者の人権

文芸の散歩道 半村良著『産霊山秘録』 「明日への祈り」の心で闘う「ヒー族」の物語 桑原律

人権と部落問題 838 (部落問題研究所刊, 2013. 1) : 630円

特集 環境問題と人権

アイヌ副読本の記述問題から見えてくるもの 姥谷広昭
文芸の散歩道 多喜二の習作期にみる改作過程について 川端俊英

じんけんぶんかまちづくり 37 (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2012. 12)

「週刊朝日」の差別記事に思う 重本洋輔

備忘録「週刊朝日」差別事件 佐佐木寛治

季刊人権問題 369 (兵庫人権問題研究所刊, 2012. 10) : 700円

私の八鹿高校事件 前川貫治

振興会通信 106号 (同和教育振興会刊, 2012. 9)

『私と同朋運動』 1～同朋運動の視点から沖縄問題を考える～ 登尾唯信

水平社90年の歴史に学ぶ～私を理解するには勇気が要る～ (ニーチェ) 2 神戸修

振興会通信 107 (同和教育振興会刊, 2012. 11)

同朋運動史の窓 14 左右田昌幸

真宗 1303 (真宗大谷派宗務所刊, 2012. 10) : 250円

人の世に熱あれ人間に光あれ 1 真宗大谷派同和関係寺院協議会

人民新聞 1463号 (人民新聞社刊, 2012. 11. 5) : 150円
エスタブリッシュメントめざす橋下の「被差別部落」への近親憎悪 松裏功三さんに聞く

月刊スティグマ 195 (千葉県人権啓発センター刊, 2012. 10) : 500円

特集 東日本大震災…千葉県の被災状況と復興

日本人はなぜ人権に弱いのか 4 鎌田行平

月刊スティグマ 196号 (千葉県人権啓発センター刊, 2012. 11) : 500円

「朝日」よ、おまえもか 週刊朝日による橋下市長差別記事に対して、再度緊急に再掲載 2011年11月 橋下前大阪府知事に対する「週刊新潮」「週刊文春」の記事について 鎌田行平

月刊スティグマ 197 (千葉県人権啓発センター刊, 2012. 12) : 500円

特集 平成24年度千葉県人権啓発指導者養成講座報告 1

地域と人権 1117 (全国地域人権運動総連合刊, 2012. 10. 15) : 150円

どこへ行く同和研修 犠牲だった太郎との結婚 中田宏
国民的融論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と展開— 22 第17章 教育啓発をめぐる 丹波正史

地域と人権 1118 (全国地域人権運動総連合刊, 2012. 11. 15) : 150円

『週刊朝日』の「ハシタ」緊急連載 人権委設置法に口実か 報道論理欠き橋下批判に逆効果 植山光朗
国民的融論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と展開— 23 第18章 組織建設と支部活動の手引き 丹波正史

月刊地域と人権 343 (全国地域人権運動総連合刊, 2012. 10) : 350円

特集 第8回全国研究集会 (京都) 記念講演 歴史研究と部落問題の解決 鈴木良

月刊地域と人権 345 (全国地域人権運動総連合刊, 2012. 12) : 350円

特集 第8回地域人権問題全国研究集会 (第3分科会)

最近の報道、出版にみる部落差別 (問題) 認識 奥山峰夫

月刊地域と人権 346 (全国地域人権運動総連合刊, 2013. 1) : 350円

特集 第8回地域人権問題全国研究集会 (第5分科会)

近世身分社会の形成と展開—紀州の具体像を通して— 藤本清二郎

教科書記述と子どもの賤称語発言 西村導郎

地域と人権京都 632 (京都地域人権運動連合会刊, 2012. 11. 1) : 150円

「同和奨学金」の不当返還請求に反対する裁判闘争!

地域と人権京都 633 (京都地域人権運動連合会刊, 20

か木屋町通か 伊藤之雄

『京都市政史』刊行記念「戦後京都の軌跡」展によせて
一史料『京都市建物疎開跡地処理計画』の紹介 川口朋子

京都部落問題研究資料センター通信 29号 (京都部落問題研究資料センター刊, 2012. 10)

在野の融和運動家・植村省馬 2 吉田文茂

本の紹介 吉村智博著『近代大阪の部落と寄せ場—都市の周縁社会史』 廣岡浄進

収集逐次刊行物目次 (2012年7月~9月受入)

週刊金曜日 920 (金曜日刊, 2012. 11. 16) : 580円

特集 部落差別を考える

『週刊朝日』問題の本質 角岡伸彦/大阪ルポ うちって
「部落」なん? 野中大樹/部落問題Q&A

クロノス 34 (京都橘大学女性歴史文化研究所刊, 2012. 11)

講演録 女性史からジェンダーへ 横田冬彦

グローブ 71 (世界人権問題研究センター刊, 2012. 10)

神輿を昇く人々—洛中洛外区屏風諸本から— 西山剛

敦賀地方の産小屋を訪ねて 福嶋由里子

書評 田端泰子著『歴史のなかの女性の人権』 源淳子

藝能史研究 197 (藝能史研究会刊, 2012. 4) : 1,800円

中世京都の御霊祭をめぐる基礎的考察—応仁の乱後の復興まで— 本多健一

藝能史研究 198 (藝能史研究会刊, 2012. 7) : 1,800円

中世前期「遊女」の組織とその支配 辻浩和

研究所通信 389 (部落解放・人権研究所刊, 2012. 11) : 100円

『週刊朝日』記事 (ハシシタの本性) について 谷川雅彦

国際人権ひろば 105 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2012. 9) : 350円

特集 ささまざまなアイデンティティと複合的な差別

国際人権ひろば 106 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2012. 11) : 350円

特集 韓国スタディツアー 地域に学ぶエンパワメントと参加・木浦&ソウルへの旅

こべる 235 (こべる刊行会刊, 2012. 10) : 300円

尼崎だより 42 老人の醸し出す雰囲気助けられて—受託した少年たちのその後— 中村大蔵

四日市から 25 暮らしの中の生きづらさ 坂倉加代子

『こべる』終刊に寄せて 9 ハンセン病問題と出会う 吹原竜二

こころのつぶやき 5 頭から心への長い旅 マグダレナ三千代

いのちを生きる 55 メキシコでの再会の夏 長谷川洋子

<幻の銀河>—写真と文 小林茂

濃水飛山記 藤田敬一

こべる 236 (こべる刊行会刊, 2012. 11) : 300円

自分史のこころみ 12 今を生きる街から—東九条と私— 金光敏

四日市から 26 がんを発症する 坂倉加代子

いのちを生きる 56 生と死の狭間で 長谷川洋子

<幻の銀河>—写真と文 小林茂

濃水飛山記 藤田敬一

こべる 237 (こべる刊行会刊, 2012. 12) : 300円

ひろば 151 部落解放運動とは何だったのか 山下力+藤田敬一

四日市から 27 祈りといのち 坂倉加代子

<幻の銀河>—写真と文 小林茂

濃水飛山記 藤田敬一

こべる 238 (こべる刊行会刊, 2013. 1) : 300円

『こべる』終刊に寄せて 10 「自分以外の何者をも代表しない」ということ 福岡ともみ

『こべる』終刊に寄せて 11 子どもの揺れる心に伴走しながら 松岡勲

『こべる』終刊に寄せて 12 私は今まで以上に頑固者になった 重信陽子

四日市から 28 なあなあで行こう 坂倉加代子

<幻の銀河>—写真と文 小林茂

濃水飛山記 藤田敬一

こるむ 号外 (在特会らによる朝鮮学校に対する襲撃事件裁判を支援する会刊, 2012. 11)

ヘイトスピーチの社会侵害性 金尚均

在日朝鮮人史研究 42 古庄正先生追悼号 (在日朝鮮人運動史研究会編, 2012. 10) : 2,400円

国家と人権の境界を超えた比較研究とその意義—1920年から1945年までの大阪朝鮮人コミュニティとシカゴ黒人コミュニティの経験を中心として— 堀田千里

1920—1945年、大阪東成地域における朝鮮人の生活と鶴橋署 塚崎昌之

日本帝国の解体と朝鮮人「内地留学」の終焉—戦後直後・朝鮮人留学生政策を中心に— 朴成河

常磐炭田朝鮮人戦時動員被害者を訪ねて—韓国での調査報告から— 龍田光司

茨城県・関本炭砒朝鮮人鉱夫の解放前後の状況—会社文書を中心に— 長澤秀

1951年 東京朝鮮人中高級学校事件—戦後の布施辰治と朝鮮人— その1 川口祥子

元農耕勤務隊黄敬二 (ファン・ギョンチュン) 氏のインタビュー 秋岡あや/鈴木久美

資料紹介 『昭和十一年中ニ於ケル山梨県特高情勢』 鮎澤譲

書評 Erin Aeran Chung, Immigration and Citizenship

解放新聞 2595号 (解放新聞社刊, 2012. 11. 26) : 80円
山口公博が読む今月の本

『今日を生きる』(大平光代著) / 『日本語練習帳』
(大野晋著) / 『戦後文学は生きている』(海老坂武著)

解放新聞 2596号 (解放新聞社刊, 2012. 12. 3) : 120円
ぶらくを読む 75 皮革<かわ>の魅力と新しい動向 湧
水野亮輔

解放新聞 2598号 (解放新聞社刊, 2013. 12. 17) : 80円
解放の文学 80 赤坂真理『東京プリズン』 音谷健郎

解放新聞 2599号 (解放新聞社刊, 2013. 12. 24) : 80円
山口公博が読む今月の本

『海辺の光景』(安岡章太郎著) / 『カクテル・パーティー』
(大城立裕著) / 『牛 築路』(莫言著)

今週の1冊 『幕末史』(半藤一利著)

フィールドワーク 京都の被差別民と芸能およびキリシ
タン迫害

解放新聞 2600号 (解放新聞社刊, 2013. 12. 31) : 80円
日光神領と被差別民 和田献一

新春に読む本の紹介

『検証 福島原発事故 官邸の100時間』(木村英昭著)
/ 『ルポ労働格差とポピュリズム』(藤田和恵著) /
『パギヤんの大阪案内 ぐるっと一周環状線の旅』(趙
博著)

賤称語が残る古地図事件で見解

解放新聞大阪版 1932号 (解放新聞社大阪支局刊, 201
2. 10. 15) : 100円

リパティおおさか 寄付で存続へ

解放新聞大阪版 1934号 (解放新聞社大阪支局刊, 201
2. 11. 5) : 100円

出自あばく差別記事 『週刊朝日』、朝日新聞出版に抗
議

解放新聞大阪版 1936号 (解放新聞社大阪支局刊, 201
2. 11. 25) : 100円

「同和地区」論文で糾弾会 都島区長が謝罪

「週刊朝日」差別記事問題は終わっていない 部落への
偏見をあおる許しがたい差別記事 部落解放同盟大阪府
連合会安中支部

解放新聞東京版 797号 (解放新聞社東京支局刊, 2012.
10. 1) : 90円

革と履物の町 浅草に生きて 1 戦後、製靴産業に飛び込
んで 独立してトロット製靴を創業 稲川實

解放新聞東京版 798号 (解放新聞社東京支局刊, 2012.
10. 15) : 90円

革と履物の町 浅草に生きて 2 製靴業界の振興と発展に
とりくみ 皮革文化を多くの人に届ける 稲川實

解放新聞東京版 799号 (解放新聞社東京支局刊, 2012.
11. 1) : 90円

「重ね地図」化は差別を助長と出版社が見解を示す
革と履物の町 浅草に生きて 3 地元の製靴産業を教える
子どもは屑革で何が出来るか考えている 稲川實

解放新聞東京版 800号 (解放新聞社東京支局刊, 2012.
11. 15) : 90円

リパティおおさかの存続へ 朝治武, 聞き手 長谷川三郎

解放新聞奈良県版 965 (解放新聞社奈良支局刊, 2012.
9. 10) : 50円

主張 差別論という考え方について

解放新聞奈良県版 966 (解放新聞社奈良支局刊, 2012.
10. 10) : 50円

主張 「何トナク異ナレルガ如キ」とされたことの意味

語る・かたる・トーク 211 (横浜国際人権センター刊,
2012. 9) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 8 「問題行動」は社
会状況がつくりだす 外川正明

性同一性障害者としての人生〜女性だった25年間、そし
て男性としてのこれから〜 前田良

語る・かたる・トーク 212 (横浜国際人権センター刊,
2012. 10) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 9 父と娘の小学校三
年生の時の詩 外川正明

語る・かたる・トーク 213 (横浜国際人権センター刊,
2012. 11) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 10 生活背景を知るこ
とで生まれる授業の工夫 外川正明

「人権の朝日」の人権感覚 三谷誠

語る・かたる・トーク 214 (横浜国際人権センター刊,
2012. 12) : 500円

つれづれの人権日誌 77 “冬来たりなば春遠からじ” 1
部落解放に資する教育とは何だろうか 林力

シリーズ「解放教育」継承への扉 11 教師が毅然とした
姿勢を示す時 外川正明

かわとはきもの 161 (東京都立皮革技術センター台東
支所刊, 2012. 9)

靴の歴史散歩 106 稲川實

皮革関連統計資料

関西大学人権問題研究室紀要 64号 (関西大学人権問
題研究室刊, 2012. 9)

大坂町奉行吟味伺書の考察 2 藤原有和

中国人民志願軍編『常用朝鮮語言手冊』とその成立背景
熊谷明泰

母親を「支援」すること 育児支援からキャリア支援へ
の広がり問題点 酒井千絵

京都市政史編さん通信 43号 (京都市市政史編さん委
員会刊, 2012. 9)

京都市都市計画事業の1921年前半(上) 一河原町通拡築

収集逐次刊行物目次 (2012年10月～12月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

IMADR-JC通信 171 (反差別国際運動日本委員会刊, 2012.9) : 750円

特集 マイノリティ女性フォーラムin沖繩

ウィングスきょうと 112 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2012.10)

図書情報室新刊案内

『女たちが動く 東日本大震災と男女共同参画視点の支援』(みやぎの女性支援を記録する会編著) / 『ダイバーシティと女性活躍の推進 グローバル化時代の人材戦略』(経済産業省編)

大塩研究 67号 (大塩事件研究会刊, 2012.9)

<大塩と私>14 森田康夫氏に聞く 聞き手 久保在久

解放新聞 2586号 (解放新聞社刊, 2012.9.24) : 80円
今週の1冊 『二世兵士激戦の記録 日系アメリカ人の第二次大戦』(柳田由紀子著)

解放新聞 2587号 (解放新聞社刊, 2012.10.1) : 120円
今週の1冊 『テレビの金持ち目線—「生活保護」を叩いて得をするのは誰か』(和田秀樹著)

人権問題シンポジウム2012 1 報告者 神原文子

ぶらくを読む 73 部落をみている文学 大菩薩峠・中上健次・文豪たち 湧水野亮輔

山口公博が読む今月の本

『新・カムイ伝のすゝめ 部落史の視点から』(中尾健次著) / 『河原ノ者・非人・秀吉』(服部英雄著) / 『たどたどしく声に出して読む歎異抄』(伊藤比呂美著)

解放新聞 2288号 (解放新聞社刊, 2012.10.8) : 80円
解放の文学 孔枝泳と『トガニ』 音谷健郎

人権問題シンポジウム2012 2 同和問題にかかわる市民意識のいま 伊藤悦子

フィールドワーク (栃木) 「日光神領と被差別民」

解放新聞 2289号 (解放新聞社刊, 2012.10.15) : 80円
山口公博が読む今月の本

『騙されたあなたにも責任がある 脱原発の真実』(小出裕章著) / 『「ぐずぐず」の理由』(鷲田清一著) / 『苦海浄土』(石牟礼道子著)

人権問題シンポジウム2012 終 同和問題にかかわる市民意識のいま 阿久澤麻理子

今週の1冊 『物語 京都学派 知識人たちの友情と葛藤』(竹田篤司著)

解放新聞 2290号 (解放新聞社刊, 2012.10.22) : 80円
リバティおおさか存続・運営へ寄付を

解放新聞 2591号 (解放新聞社刊, 2012.10.29) : 80円
今週の1冊 『共通番号制なんていない!』(小笠原みどり・白石孝共著)

第37回部落解放・人権西日本夏期講座 講演要旨 現代の部落差別—取材を通して見えてきたこと— 1 林由紀子

解放新聞 2592号 (解放新聞社刊, 2012.11.5) : 120円
『週刊朝日』(2012年10月26日号) 掲載記事「ハシタ奴の本性」に関する抗議文 部落解放同盟中央本部

第37回部落解放・人権西日本夏期講座 講演要旨 現代の部落差別—取材を通して見えてきたこと— 2 林由紀子

今週の1冊 『被ばくと補償 広島、長崎、そして福島』(直野章子著)

ぶらくを読む 74 半生を山口県部落史研究に献げる 布引敏雄の軌跡 湧水野亮輔

解放新聞 2594号 (解放新聞社刊, 2012.11.19) : 80円
解放の文学 79 中上健次と『枯木灘』 音谷健郎
今週の1冊 『歴史を考えるヒント』(網野善彦著)

事務局よりお知らせ

◇今年度の部落史講座が無事終了しました。後半4回分の講演要旨を掲載していますが、スペースの関係で簡単な報告しかできませんので、詳しくは3月末に発行を予定しています『2012年度部落史連続講座講演録』をご参照ください。講演録の郵送をご希望の方は、メール・電話にてご連絡ください。

◇当資料センターのホームページのアドレスが下記に変わりました。お手数ですが、「お気に入り」「ブックマーク」等の変更をお願い致します。尚、メールアドレスは変更していません。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://suishinkyokai.jp/shiryo/index.html>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分